

〔若手研究者よりの報告〕

演劇と美術の交差点としての挿絵入り
プログラム

袴田 紘代

画家が舞台芸術から着想を得るのは歴史的に珍しいことではないが、19世紀末には画家をはじめとする芸術家たちが舞台作りに関わるようになる。このように劇団員、劇作家、画家、音楽家を巻き込む、舞台を介した一種の芸術共同体が形成されるなかで生み出されたもののひとつが、挿絵入りプログラムであった。本稿では、本媒体を美術史側から考察してきた筆者の研究について報告させてもらい、演劇研究の方々と情報共有ができればと願っている。

ここでいう「挿絵入りプログラム」の語が指すのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて作られた公演プログラムで、石版技法による一枚刷りを基本とし、全ページ大の挿絵のなかに舞台演目や配役、会場などの最小限の文字情報を盛りこんだものであり、協力雑誌の広告も挿入されることがある(図1)。形式的には絵入りポスターに近い(「プログラム=ポスター (programme-affiche)」とも呼ばれるが、本来はプログラムとして構想され、いわゆる広告用ポスターとは別物だったようだ。この形式はアンドレ・アントワヌ率いる自由座が1880年代末より発刊しはじめた多色刷りのプログラムを発端とし(図2)、冊子形式・活字中心の従来のプログラムとは一線を画す新しい試みであった。本媒体はその後、1893年にオーレリアン・リュニエ=ポーの立ち上げた制作座(Théâtre de l'Œuvre)に引き継がれて形式が洗練されていった。

筆者はこの媒体を考察の軸にして博士論文を執筆した。美術史学を専攻する筆者が、このように演劇学と接する領域に足を踏み入れることになった経緯は、次のようなものだった。筆者は修士論文でナビ派の画家エドゥアール・ヴェイヤールが描いた室内画について論じるなかで、その造

形様式が形成される過程で象徴主義演劇の理念や舞台演出の工夫が少なからぬ影響をあたえたと考えるようになり、19世紀末の画家と演劇の関係に興味をもった。実際にヴェイヤールは制作座の舞台づくりにとりわけ熱心に関わっており、この劇団のために挿絵入りプログラムを多く手がけていたという背景もある。この関心が博士論文の起点となり、そののち留学先のフランスで学際的な風土にあと押しされ、美術史学と演劇学の交差する媒体として挿絵入りプログラムに着目するようになった。

本媒体はまた、19世紀末に開花した挿絵文化のコンテクスト、すなわち芸術版画も含めたイメージの出版・流通の加速とも深くむすびついている点で、つまり版画史において重要な「創作版画(オリジナル版画)」流行の文脈にあてはまる点で、ほりさげて考えるべき対象だった。制作座は上演にあたって小冊子型の公演パンフレットも用意したのだが、それとは別に挿絵入りプログラムを刷って劇団の予約会員や招待客向けの特典として頒布した。おそらく劇団の資金難ゆえに、大半が薄いベラム紙に単色印刷という廉価な仕様だが、職業挿絵家のかわりに前衛的なナビ派の画家たちや、退廃的なムードのポスター作品でよく知られるアンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック、またノルウェー出身のエドヴァルド・ムンクといった「芸術家」を採用することで、プログラムの美的価値が保証されている。そのため公演のちも、あくまで芸術作品という枠のなかで、一種の「創作版画」として販売され、美術愛好家たちの蒐集アイテムとなる。こうして挿絵入りプログラムは芸術出版の波にのって、劇場の文化的ステータスを引き上げることに一役買ったのだ。

このように挿絵入りプログラムは美術史において「作品」の扱いを受けるが、やはり広告という実用目的も帯びたエフェメラルな性格も持ち合わせており、ハイブリットな存在である。さらには、象徴主義演劇といういくぶんニッチな分野と境界を接しており、(美術史研究者にとっては)少しやっかいな相手とはいえる。そのためか、本対象が美術史研究において日の目を見るようになったのは比較的近年のことであった。この媒体

がひとつのジャンルとして研究対象に措定され、美術史学の俎上にあげられたのは、ジュヌヴィエーヴ・エトケンの学位論文『Les peintures et le théâtre autour de 1900 à Paris』(École du Louvre, 1979)によるところが大きい。これは美術史研究における、象徴派画家たちの再評価の動きとも連動している。エトケンはナビ派画家の関わった劇団(自由座、芸術座、制作座)のプログラムを対象に、基礎目録ともいえる網羅的な論考を提出した。だがその後、この分野で大きな研究の進展はみられない。また、エトケンも含めた先行研究は、概してプログラムに関連する上演や制作にまつわる史実——つまりプログラムをとりまく外的情報——を拡充する一方で、挿絵の造形様式や図像の選択について十分な分析をおこなってこなかった。それは上述したように、この媒体の捉えどころのない多義的な性格ゆえと考えられる。こうした状況をふまえ、博士論文においてはプログラムに描かれる個々の挿絵を熟視することを第一とし、象徴主義演劇の理念や実態(主に芸術座と制作座)を考慮しつつ、挿絵イメージがいかにかに構想され、いかに同時代美術と関連するのか、そしてプログラム制作の経験が画家の作品制作といかに結びつくかを中心に論じた。くわえて、舞台制作や協力雑誌の活動に画家がいかにかに介入し、美術と演劇のあいだで交わされた理念的な相互作用についても考察した。演劇学に対する貢献があったかどうかの判断は、筆者の手にあまる。とはいえ、たとえば舞台の視覚的要素や、劇場をめぐるイメージを研究する方々になんらかの情報が提供できるなら幸いと思っている。

そこで以下では、本研究にあたって筆者がパリ市内で確認できた資料の所在や内容をいくつか紹介することで、情報提供の足しにしたい。

挿絵入りプログラムは当時から蒐集の対象となっていたため、個人コレクターが集めた揃いのプログラムが遺贈などによって公的機関に保管される例も少なくない。同プログラムの網羅的コレクションを有する機関として第一に挙げられるのは、フランス国立図書館の舞台芸術部門内のロンデル・コレクションと、同図書館版画・写真部門である。同コレクションには挿絵入り演劇プログラムのほかにも、制作座の上演にまつわる劇評な

どの文字資料も多く含まれている。

くわえて、この国立図書館リシュリユー館に隣接する、フランス国立美術史研究所(通称 INHA)の附属図書館には、きわめて状態の良い挿絵入りプログラムが保管されている。すなわち、ジャック・ドゥーセ・コレクションに含まれるプログラムである。服飾デザイナーとして大成したドゥーセが築いた美術作品および関連資料の膨大なコレクションは、まず1918年にパリ大学へ寄贈され、その後移転を経て現在は INHA に帰属している。啓蒙的な美術愛好家であったドゥーセらしく、作品保存状態もよく、また同じ刷りが複数点保管されていることもある。

こうした蒐集家たちのコレクションのほかに、フランス劇作家・劇音楽家協会(通称 SACD)の付属図書館に保管されるリュニエ=ポー・コレクションも忘れてはならない。このリュニエ=ポーが旧蔵していた資料類は、ロンデル・コレクションと同じく挿絵入りプログラム以外に上演に関する諸資料や書簡がまとめて保管されている。

またパリ警視庁の資料室にもいくぶん特殊な関連資料が保管される。19世紀末には演劇の検閲が緩和されたものの、同時代の無政府主義思想の高まりとテロの多発を受けて、上演の際にアナキストとして当局に監視されていたメンバーが関与していたり、アナキズム的思想を帯びるとみなされた戯曲が上演されたりする際には警官が監視に入った。当の制作座もしばしば監視の対象となり、公演の折には監視のレポートが作成され、また劇評類もあわせてスクラップされた。現在こうした機密資料が公開されている。もちろんごく形式的に作成されたレポートもあり、ここに記された情報を事実として鵜呑みにすることは控えなくてはならないが、アナキストや観客層の報告は警視庁ならではの報告である。

ほかにパリの研究機関としては、演劇史協会がある。同機関の図書館に所蔵される一次資料は、劇作家であり俳優でもあったレオン・シャンスレルのコレクションを中核としたものだが、1890年代の制作座の活動に関連する資料はほとんど含まれない。ただし、同時代の諸劇場の公演パンフレットといったエフェメラルな媒体を多く所蔵しており、劇場をめぐるイメージを広くとらえるう

えで有益となってくるだろう。

さいごに、挿絵入りプログラムの研究がどのような射程をもちうるか触れて末尾としたい。同プログラムに特化した研究はいくぶん停滞しているにせよ、たとえば演劇学研究者のミレイユ・ロスコ＝レナや文学研究者のヴェルノワ・ソランジュによる研究のように、近年は象徴主義演劇に関する研究のみならず、画家＝挿絵家と演劇を含めた当時の美術・文学界との関係を扱った研究が目を

ひくようになった。ポスターや挿絵本、挿絵入り雑誌といったイメージと出版をめぐる、広く文化史に包括される視座から引き合いに出されることもある。実際、筆者が研究をすすめるなかで感じるようになったのは、挿絵入りプログラムの真価は、「創作版画」の枠組みに収まりきらないこの多義性にあるということだった。今後はこの曖昧ともとれる多義的な性格が、学際的な議論を引きだす動力になるものと期待している。



[図1] エドゥアール・ヴェイヤール、制作座でのヘンリック・イブセン作『ロスメルスホルム』上演時のプログラム（1893年、リトグラフ、22.5 x 30.3 cm）
（図版出典：Patricia Eckert Boyer, *Artists and the Avant-Garde Theater in Paris 1887-1900*, exh. cat., Washington, D.C.: National Gallery of Art, 1998, p. 105）



[図2] アレクサンドル・シャルパンティエ、自由座でのレオン・ド・ロニー作『ネル・ホルム』上演時のプログラム（1891年、カラー・リトグラフに型押し、22 x 18.4 cm）
（図版出典：Patricia Eckert Boyer, *Artists and the Avant-Garde Theater in Paris 1887-1900*, exh. cat., Washington, D.C.: National Gallery of Art, 1998, p. 44）